

山東地域における中国南方産陶瓷器の 流通に関する研究（その1）

—宋墓に副葬された事例を中心に—

徐 波^{※1} 徳 留 大 輔^{※2}

要旨：山東地域において北宋墓葬出土の南方産陶瓷器は主に北宋（前・）中期、後期の二段階に分けられる。南方産陶瓷器は北宋中期の墓葬内での発見事例は極めて少なく、後期墓葬からは比較的多く見られる。北宋中期の南方産陶瓷器は主に沿岸地帯で発見されており、海上交易ルートと関連していると考えられる。北宋後期になると、南方産陶瓷器は山東の内陸地区からも発見されており、商品として山東地域に流通し始め、北宋後期末頃の11世紀後半から12世紀初頭にはさらに広く流通している。但し、流通する範囲は一定の経済力をもつ社会の中層以上の人々、つまり士大夫以上の人々の間での流通と使用に限られ、それ以外では在地の白釉瓷を使用していた。南方産陶瓷器は山東での流通は主に海路を介しており、北宋後期になると海運以外にも、内陸の運河を利用した輸送も加わり、このことが南方産陶瓷器の山東地域内での流通域を広げたのである。

キーワード：山東地区 南方産陶瓷器 分布 流通

I、はじめに

山東地域は東側に渤海湾、黄海を臨み、新石器時代以来海上ルートを通して中国南方との文化的交流が存在することが知られている。また山東の内陸地域は隋代以降、中国南北をつなぐ運河が整備され、運河を利用した南北の交流や交易も盛んに行われてきた。その山東地域は北朝時期には寨里窯址などの存在が知られ、その後も河北の定窯や磁州窯などの影響を受けながら白釉瓷を中心とする陶瓷器生産が行われてきた。山東地域の中で使用された日常的な陶瓷器は主に在地窯の製品であった。一方で、中国のその他の地域と同様に、南方産の陶瓷器も流通し、使用されていたが、山東地域で出土する事例が少ないこともあり、南方産陶瓷器に関する整理・研究はほとんど行われていない。

本研究は、平泉と同時代あるいは前後の時代の中国大陸の都市や集落における南方産陶瓷器の受容および流通のあり方について比較研究を行うことを最終的な目標とするものである。その中で本稿では、比較的資料の整理が行いやすい墓葬資料を中心に、10～12世紀、おもに北宋時代（一部、金あるいは南宋前期）の墓地出土資料を中心に整理を行う。なお本論で扱うおよその時期区分としては北宋太祖、太宗、真宗の時期を前期（960～1022）、中期が仁宗、英宗の時期（1023～1067）、

※1 山東博物館典蔵部

※2 公益財団法人 出光美術館、岩手大学平泉文化研究センター

北宋後期が神宗、哲宗、徽宗、欽宗（1068～1127）として位置付ける。

Ⅱ、資料と時期

現在までのところ、当該期の南方産の陶磁器を副葬していた事例としては10箇所の墓地群で確認されている¹⁾（図1）。副葬されている南方産陶磁器の多くは景德鎮窯系の青白瓷あるいは白瓷が主要である（附表）

①煙台牟平県北頭墓群²⁾

山東半島に所在する煙台牟平県北頭墓群は、牟平県城から東北に30kmに位置し、また北に1.5kmには黄海を臨む場所に所在している。墓群は村民が採土作業を行っていた際に偶然発見され、1992年4月に煙台市博物館と牟平県文管所により緊急発掘調査が行われ、宋代石棺墓2基（1号墓、2号墓）が検出された。1号墓からは瓷碗1点、石硯1点、銅銭1枚が出土した。2号墓からは瓷碗1点、陶硯1点が出土した。また2号墓の南側付近で瓷碗を1点検出している。これら3点はいずれも青白瓷碗である（図2-1～3）。

1号墓出土の輪花碗（M1:1）は、口縁部はわずかに外反する。腰部は丸みをおび、内底はやや厚みを帯びる。高台は比較的高い。底部裏には3箇所目跡がある。胎は灰白色で、高台外面の畳付脇から高台内側は無釉で露胎である。口径17cm、器高7.5cm、高台径8cm、高台高1cmである（図2-1）。これは湖田窯の墩式碗と称されるタイプに近く、湖田窯の報告³⁾では二期3段～三期4段に主に見ら

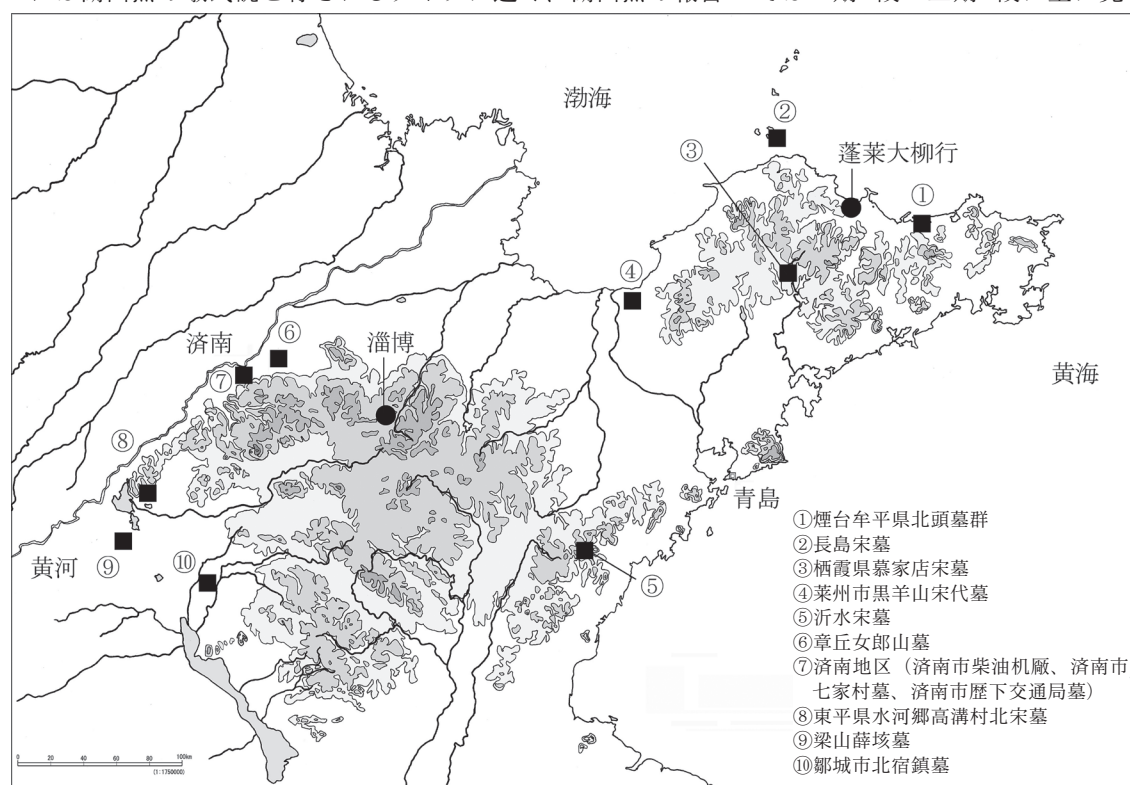


図1 山東地域北宋期における南方産陶磁器を副葬した墓地分布図

1) 当該研究における現地での実見観察を含む調査は継続中であり、すべての製品を実見しているわけではない。現状ではあくまでも南方産の陶磁器製品の可能性があるものは可能な限りピックアップしている。今後必要に応じて修正がでる可能性も否めないが、少しでも問題認識を現地の研究者とも共有する必要があるため、拙稿を執筆し、ご批判の機会を得たいと考えた次第である。

2) 林仙庭、侯建業 1997 「山東牟平県北頭墓群清理与調査」『考古』1997年3期、50-57頁。

3) 江西省文物考古研究所 景德鎮民窯博物館 2007 『景德鎮湖田窯址 1988-1999年考古発掘報告』文物出版社

れ、11世紀前半～12世紀のものと考えられる。2号墓出土の輪花碗（M2:1）は底部から腰部にかけて若干湾曲し、口縁部に掛けてほぼまっすぐのび、口縁部でわずかに外反する。高台は低い。胎は灰白色で細かい。総釉であり、白色の中にやや黄色を帯びる釉調である。口径16.2cm、器高6cm、底径7cmである（図2-2）。このほか、1号墓付近から検出された碗（採:1）は、口縁部がわずかに外反し、高台が高い。総釉である。口径15cm、器高10.4cm、高台径5.5cm、高台高1.5cmであり（図2-3）、11世紀中頃～12世紀前半に見られる。いずれも景德鎮窯の製品というよりはその影響を受けた、安徽省や湖南省の青白瓷の可能性⁴⁾がある。

これら3点は同一墓による一括出土品ではない（墓の特徴の詳細に関しては後述する）が、M1とM2の造墓時期はほぼ同時期であると考えられる。M1からは祥符元宝（1008～1016）が出土しており、北宋の前期まで遡る可能性があるが、青白瓷の年代観から考えると、11世紀中頃、つまり北宋中期頃に位置付けられる。

②長島宋墓⁵⁾

1995年10月に長島県の郵便局の建築工事に伴い発見され、長島県博物館などにより緊急調査が行われた。墓域は約30㎡で、山を背にし、眼前には海を臨む。合計で4基の墓が検出され、そのうち2基（1号墓、2号墓）の調査が行われた。2基の墓は東西に並列しており、両者の間隔は1mである。墓地の形態と構造はほぼ同じで、石を積み重ねて墓道とドーム状の天井を形成している。1号墓は単人葬であり、瓷罐1件、瓷碗1件と銅銭が副葬されている。瓷碗（M1:1）は端反り気味の口縁部で、胴部は斜直に広がる。胎は薄く、精緻であり、釉色には艶がある（図2-4）。器高4.2cm、口径11cm、高台径4.2cmである。報告者は青釉の釉調であるが、景德鎮窯系としている。今後の実見調査の課題としておきたい。なお2号墓は2人埋葬されており、副葬品は銅銭のみである。1号墓の銅銭は元豊通宝（1078～1085）、2号墓は銅銭2枚が検出され、年代が新しいものとして祥符通宝（1008～1016）が検出されている。1号墓の年代は北宋後期として報告されている事例である。

③栖霞県慕家店宋墓⁶⁾

1980年3月に栖霞県觀里公社慕家店大隊三隊が慕家店村での住居建築時に、当時の地表面から33cmのところで2基の墓を発見されている。

1号墓は券磚室墓で単人葬である。副葬品は銀簪2件、白瓷罐2件、青白瓷合子⁷⁾1件、白瓷盃1件、白瓷碗1件、銅鏡1件、銅銭38枚である。南唐の開元通宝2枚以外の残りの銅銭は、いずれも北宋時期のものであり、太宗から哲宗までの6代の皇帝、14種類の銅銭が見られる。

碗（図2-5）は広口で高台が高いタイプであり湖田窯では第三期（11世紀第3四半期～12世紀前半）に多くみられるタイプである。青白瓷合子（図2-6）は稜の多い瓜形のタイプで、底部には型押しで「段家合子記」と表されている。径10cm、器高6cmである。類似するタイプは安徽合肥の馬紹庭夫婦墓⁸⁾（北宋政和8年、1118）に見られるほか、11世紀代にまで遡る事例もある⁹⁾。白瓷盃（図2-7）は鼓腹で丸底気味である。胎は堅くきめ細かい。器の内外面ともに施釉され、青色をおびた白色を呈する釉色である。器壁の厚さは1mmと非常に薄い。口径6.6cm、高5.5cmである。

4) 景德鎮窯の以外の窯の製品の可能性については、森達也氏よりご教示いただいた。

5) 沈栄民 1998 「山東長島県発現宋墓」『考古』1998年5期、94頁。

6) 栖霞県文化館 1987 「山東栖霞慕家店宋墓」『文物資料叢刊』第10輯（1987年3期）、175-176頁。

7) 報告文では1号墓、2号墓ともに青瓷の合子とあるが、景德鎮窯系の青白瓷と思われる。

8) 合肥市文物管理处 1991 「合肥北宋馬紹庭夫妻合葬墓」『文物』1991年第3期、26-38頁。

9) 馬紹庭夫婦墓さらには江蘇江陰葛閣夫婦墓、内蒙古敖漢旗白塔故無名氏墓（遼大康7年、1079以前）から出土した青白瓷合子の類似性については、森本氏が既に指摘している。森本朝子 2003 「博多遺跡群出土の合子について」『博多研究会誌』第11号、21-41頁。

附表 山東地区北宋代墓地出土南方産瓷器一覧

番号	地図	時期 (北宋)	出土地点	器種	所蔵機関	備考
1	①	中期	牟平県北頭墓群 M1	青白瓷碗	煙台市博物館	
2	①	中期	牟平県北頭墓群 M2	青白瓷碗	煙台市博物館	
3	①	中期	牟平県北頭墓群采集	青白瓷碗	煙台市博物館	
4	②	後期	長島県郵便局宋墓 M1	青(白)瓷碗	長島県博物館	※
5～7	③	後期	栖霞県慕家店 M1	青白瓷碗 大合子、孟	煙台市博物館	
8・9	③	後期	栖霞県慕家店 M2	青白瓷小合子2	煙台市博物館	
10～12	③	後期 政和6年 (1116)	栖霞県慕家店 M3	青白瓷碗2、合子	煙台市博物館	
	④		萊州市黒羊山宋墓	青瓷蓋付罐		※図版なし
13・14	⑤	後期	沂水県宋墓	青白瓷碗2	沂水県博物館	
15・16	⑥	後期	章丘女郎山宋墓 M208	青白瓷碗	済南市考古研究所	青瓷碗は耀 州窯系
17	⑦	後期	済南市歴下交通局宋墓	青白瓷水注	済南市博物館	
18	⑦	後期	済南市柴油机廠宋墓	青白瓷刻花碗	済南市博物館	
19・20	⑦	後期	済南市七家村墓地	青白瓷香薰 青白瓷蓋罐		済南市考古 研究所
21	⑧	後期	東平県水河郷高沟村宋墓	青白瓷暗花碗	山東博物館	
22	⑨	後期	梁山県薛垓墓地 M157	青白瓷高足杯	山東博物館	
23	⑩	後期	鄒城北宿鎮	青白瓷輪花盃(壺)	鄒城市博物館	

備考中の※は今後実見観察により南方産陶瓷器でない可能性を含む。

番号は図2の各番号に対応する。

2号墓は1号墓の東側1.5mの所に位置する券頂磚室墓である。副葬品は鍍金簪1件、銀簪1件、白瓷合子1件、青白瓷合子1件、玉水盂1件、玉合子1件、水晶珠1件、銅鏡1件である。白瓷合子(図2-8)は無文。径5cm、器高4.8cm。青白瓷合子(図2-9)は胴部に瓜形の36つの稜が表されている。径5.5cm、高3.8cm。いずれも隣接する慕家店1号墓出土の合子と同じタイプである。

1号墓中の銅銭で最も新しい時期のものは元祐通宝(1086～1093)である。墓葬の上限年代は北宋哲宗元祐年の北宋後期であり、合子などは11世紀中葉の北宋中期頃から流入していた可能性もあるが、全体としてはこれら2つの墓は11世紀後半～12世紀初頭頃の段階の北宋後期であると考えられる。

また1982年7月に、慕家店村の村民が村の東北100mの所に家を建築時に、古墓が1基発見された。先述した1号墓、2号墓から南に20mの所に所在することから3号墓とされている¹⁰⁾。3号墓は天井が円形ドーム形の磚室墓であり、副葬品は38件確認されている。その多くは墓室北側の棺の上に置かれており、墓室の東南部にも若干置かれていた。銅器、鉄器、銀器、瓷器のほか墓誌などがある。そのうち青白瓷が3件ある。

青白瓷輪花碗が2件確認されている。いずれも輪花碗で胎は薄く、精緻な作りである。そのうちのM3:5(図2-10)は口径14.4cm、器高4.7cm、厚0.1cmである。胴部形態としては斗笠碗に類似しており、11世紀中期から13世紀までに多くみられるタイプといえる。青白瓷浅腹碗(M3:6)(図2-11)は輪花形で、口縁部はかなり薄い作りである。口径11cm、器高2.5cmである。合子(M3:7)(図2-12)は、身は碗形、蓋面がやや浅い盤形であり、蓋の表面には陰刻で円文が二周と三組の波浪文が表されてい

10) 李元章 1998「山東栖霞市慕家店宋代墓伉墓」『考古』1998年5期、45-49頁。

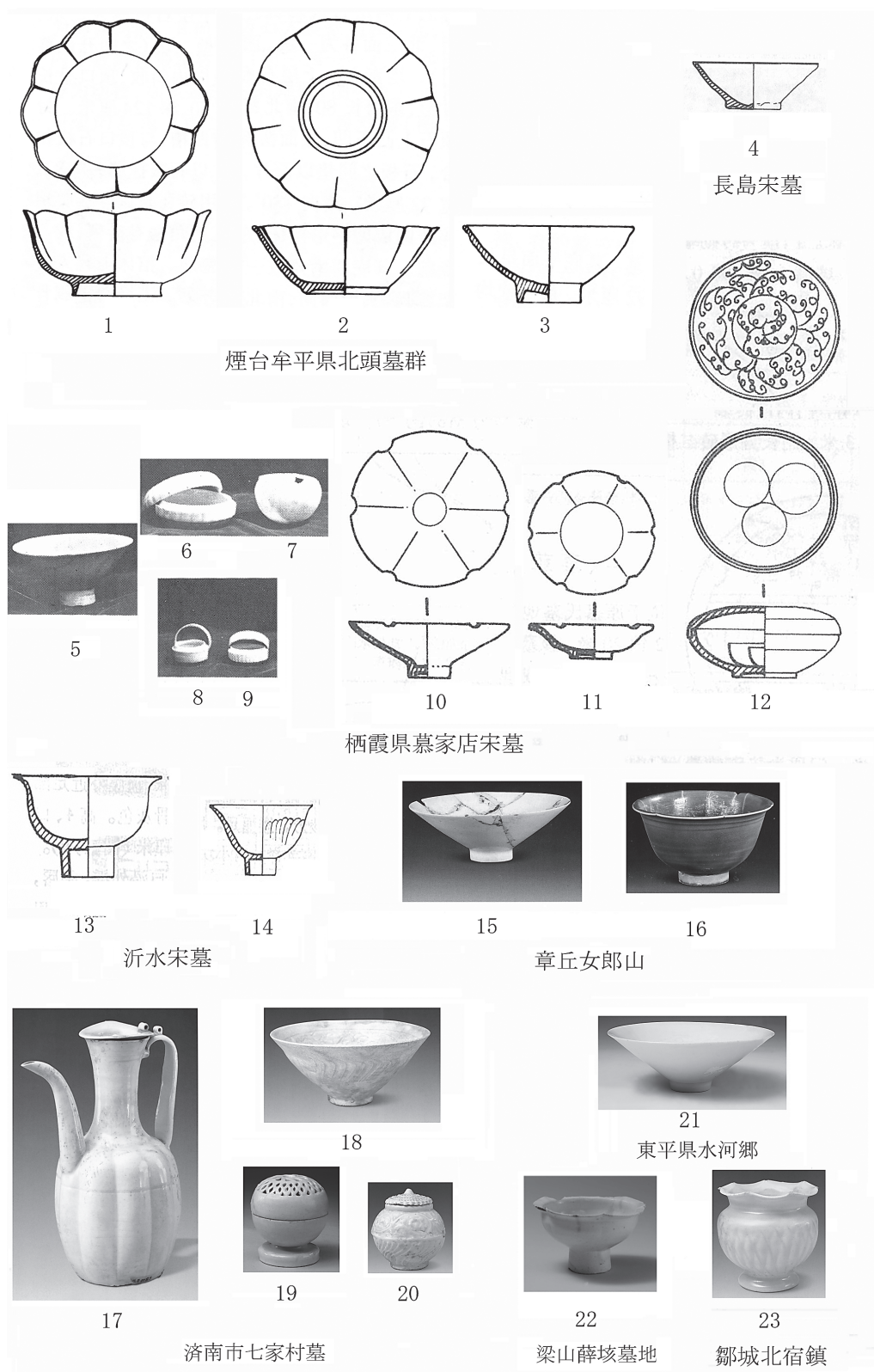


図2 山東地域北宋期における墓地出土の南方産陶瓷器

る。全体に乳白色を呈する。器高5.5cm、径13.5cmである。合子の内側には3つの小碗が配された子持ち合子である。内側の小碗はいずれも直口で、胴部は弧状を呈し、高台は低い。小碗の底と合子の

底は一体化している。小碗の径は3cm、3.5cmと4.2cmであり、器高は1cm、1.4cmと1.8cmである。小碗の内側には紅、黄、藍の三種類の顔料が残存しており、色を配合する際に用いていた道具であったと想定される。

3号墓の墓誌の記載に基づくと、墓主である慕伉は政和四年（1114）に死去し、政和六年に萊山郷帰仁里に埋葬された、北宋末期の墓葬であり、いずれの器物も北宋後期に生産、流通し、間もなく墓主とともに副葬されたのと思われる。

④萊州市黒羊山宋代墓葬¹¹⁾

黒羊山遺跡は萊州市沙河鎮黒羊山村東南約200mの台地に立地し、南に紅山、西北には黒羊山があり、北側には古河川が東南から西北方向に流れていた。遺跡から北に約10数km進むと萊州湾である。当該遺跡は煙濰高速道路の建設に際して発見され、発掘調査が行われた。発掘面積は2300㎡余りである。南向きの階段状の墓道を有する磚室墓である。墓室内の人骨は攪乱を受けているが、二次葬によるものと思われ、また2人が埋葬されたと考えられている。副葬品は青瓷の蓋付罐2件と銅銭1枚である。実見していないため詳細は今後の課題とするが、近接する地域の蓬萊では、北宋期の越州窯青瓷水注なども出土しており¹²⁾、また本遺跡の立地する地理的特徴や位置からして瓷罐は南方産の製品である可能性がある。

⑤沂水宋墓¹³⁾

1983年8月、沂水故城の南側で県文化館の敷地内での建築工事に際して検出された磚室墓から青白瓷碗、青磁盤、白瓷が出土した。なおこの墓室の平面は長方形で単室の小型墓である。

出土した青白瓷碗は2点である。1点(M沂:4, 原報告のIV式)は(図2-13)、口縁部が大きく開き、腰部がやや張り、深い胴部で、高台が高い。報告によると外面は六弁の瓜形になっている。高台内側はやや露胎になっている。胎は白色で釉は透明で光沢がある。口径12~13.5cm、器高9cm、高台径5cm、高台高3cmである。本事例は輪花碗でないが、湖田窯の出土品と比較すると、11世紀第3四半期頃から数多くみられる輪花碗IV式のタイプに近い。もう1点の青白瓷碗(M沂:5, 原報告のV式)は(図2-14)外反し、胴部は斜め真っ直ぐに伸びる。高台径が小さい。胎は薄く、釉は透明で青白色を呈し、光沢を有する。外面には貫入が見られるほか、内面には草花の文様が刻花で表されている。口径10.5cm、高6cm、高台径3cm、高台高1.5cmである。湖田窯では撇口碗Ab型に形態的に類似しており、やはり11世紀後半~12世紀前半にかけて多くみられるタイプである。

墓の年代も北宋後期頃と考えられる。

⑥章丘女郎山第208号墓(M208)¹⁴⁾

章丘女郎山M208は円形磚室墓である。墓壁上には青磚を用いて木槨構造を模倣し、階層上位者の墓であったと考えられる。副葬品は5件検出され、そのうち瓷碗が3件で、2件は棺床の東北部、1件は東南部から検出された。また貝飾りが墓主の頭骨の下部から、銅銭50枚が腹部付近から検出された。

このうち南方産の陶瓷器は白瓷碗(M208:2)と青瓷碗(208:2)である。

青白瓷碗(M208:2)はいわゆる斗笠碗と称されるタイプであり、胴部斜直で口縁部が大きく開く、高台径は口径に比べてかなり小さい(図2-15)。器高5cm、口径14cm、高台径3.6cm、器壁は0.2

10) 李元章 1998「山東栖霞市慕家店宋代慕伉墓」『考古』1998年5期、45-49頁。

11) 李振光、張英軍 2004「萊州市黒羊山商周時期遺址和周、漢、宋代墓葬」『中国考古学年鑑 2003 年』文物出版社、209-210頁。

12) 蓬萊大柳行から北宋越州窯青瓷水注が出土している。煙台市

博物館編 2006『煙台市博物館藏品選』山東文化音像出版社、90頁。

13) 沂水県文物管理站 1985「山東沂水宋墓」『考古』1985年2期、185-186頁。

14) 済南市考古研究所編著 2013『章丘女郎山』科学出版社。

～0.5cmである。なお同一の墓からは青瓷碗（M208：3）が出土している（図2-16）。広口で、口縁部は輪花形を呈する。胴部は深く、腰部は緩やかに湾曲し口縁部にかけてまっすぐ伸びる。高台はやや高い。高台部は露胎である。黄褐胎で、濃い青色の釉色である。器高6.6cm、口径12cm、高台径4.2cm、器壁の厚さは0.2～0.4cmである。この青磁は形態的な特徴からも耀州窯系の可能性が高い。

共伴した銅銭の中で年代が新しいのは元祐通宝（1086～1093）や聖宋元宝（1101）である。このことから墓地の上限年代は北宋後期徽宗年間であると考えることができ、また墓葬構造と出土遺物の特徴から11世紀後半～12世紀初期の墓地であると思われる¹⁵⁾。

⑦ 済南地区

現在、山東省の省都である済南においても都市整備に伴い宋代の墓葬が発見されており、いくつかの青白瓷が確認されている。いずれも墓地の詳細については不明であるが、出土品に関しては図録などにより公表されている。

1967年には済南市歴下交通局墓地¹⁶⁾から青白瓷水注が出土している（図2-17）。細く長い頸部に、瓜形の長い胴部を呈し、また細く長い注口をもつタイプである。平底。把手の上端には管状になった紐があり、やや凹状の盤形蓋にも紐が見られる。全体に淡い青色を呈する青白釉を掛けている。全高23.5cm、口径5.9cmである。同様の形態のものが北宋後期と思われる淄博の窖藏からも出土している¹⁷⁾。また北宋中後期頃に主に操業していたと比定される景德鎮鳳凰山宋代窯址¹⁸⁾の水注（Ba型）と形態や釉調も類似しており、ほぼ当該品も同時期のものと考えられる¹⁹⁾。

1970年済南市柴油机廠²⁰⁾の宿舎から出土した青白瓷碗1件は、高台はやや浅く、底部から口縁部にかけて斜直で斗笠碗タイプに近い（図2-18）。内壁には刻花唐草文、外壁には刻下菊弁文が表されている。北宋後期から南宋前期、11世紀後半～12世紀前半頃の製品と考えられる。

済南市七家村墓からは耀州窯系の青瓷碗²¹⁾のほか、青白瓷香炉²²⁾が出土した。香炉（図2-19）は頂部に透かし彫りがされた蓋は豆形で半円形、炉の身は深く、高台も高い。器高7.8cm、幅7.2cm、高台径5.9cmである。湖田窯の香炉Bb型に類似しており、11世紀第2四半期頃の北宋中期頃には作られ始めたタイプの製品である。また七家村墓からは白瓷の蓋付罐（小壺）も出土している（図2-20）。器高はわずか6cmと小型で、胴部が丸みをおびて膨らむ。胴部には唐草文、胴下部には斜線文が表されている。蓋には紐があり、連珠状の文様が3周巡っている。全体にやや白濁気味の釉調である。

いずれも一墓地あたりの副葬点数は少ないものの、墓地以外、あるいは近隣の淄博などの地でもこれらの青白瓷製品と類似するタイプもののものが確認されている。香炉などはやや北宋中期頃のタイプであり、やや古い段階から済南や臨淄などの地区に流入していた可能もあるが、全体でみると12世紀前後の北宋後期（から南宋前期に一部下る可能性もある）にかけて、少なくない数の景德鎮窯系の青白瓷製品がこれらの地域に流通していたことが分かる。

15) またその他の墓地からは、元末～明初の頃と思われる龍泉窯青瓷の馬上杯も南方産の瓷器が検出されている。

16) 張柏 2008『中国出土瓷器全集 6 山東巻』科学出版社、図135。

17) 張柏 2008『中国出土瓷器全集 6 山東巻』科学出版社、図98

18) 江西省文物考古研究所 浮梁県博物館 2009「江西浮梁鳳凰山宋代窯址発掘簡報」『文物』2009年第12期、25-38頁。

19) 佐藤雅彦氏はこのタイプの水注は、11世紀末～12世紀前期の可能性を指摘している。佐藤雅彦 1977「宋の白磁」『世界陶

磁全集』12 宋、小学館、174 頁。

20) 張柏 2008『中国出土瓷器全集 6 山東巻』科学出版社、図130。

21) 張柏 2008『中国出土瓷器全集 6 山東巻』科学出版社、図99。

22) 高台の形態は若干異なるが、全体に類似する形式の香炉が淄博市の窖藏からも複数の精緻な青白瓷と共に出土している。淄博市博物館 1982「山東淄博出土宋代影青瓷器」『文物』1982年12期、90頁。呂常凌主編 1996『山東文物精萃』山東美術出版社、81頁。

⑧東平県水河郷高溝村北宋墓

1987年東平県水河郷高溝村で宋墓が1基発見された。副葬品の一つに青白瓷斗笠碗²³⁾が出土している(図2-21)。器高5.2cm、口径14.4cm、高台径3.4cm。11世紀中葉から12世紀前半頃の、北宋後期から南宋前期頃の製品であると考えられる。

⑨梁山薛垓墓地第157号墓²⁴⁾(M157)

当該墓地は漢代の墓地のほかに、北宋代の磚室墓が検出されている。北宋代に関しては小児墓が多いことで特殊な墓地として注目されてきた。第157号墓は豎穴土坑磚室墓で平面は長方形を呈する。墓主の頭部付近に瓷碗と高足杯(図2-22)がそれぞれ1件出土した。

馬上杯(M157:2)は青白磁で、輪花形で、端反口縁である。胴部や緩やかに湾曲し、高台は高い。柄の部分には段などは見られない。器高9cm、口径9.8cm、高台高2cmである。北宋後期から南宋前期頃の製品である。

⑩鄒城市北宿鎮金鼎鍋廠宿舍基建築工地宋墓²⁵⁾

墓地の詳細は不明である。緊急発掘により出土した景德鎮窯系の青白瓷の輪花盃(壺)である。口縁は大きく花卉状に開き、肩が張り、ゆるやかに底部にかけてすぼまり、高台部で外に広がる。胴部には多層に配された連弁文が巡っている。釉調も美しく、光沢もあり、精緻な製品であり、11世紀後半～12世紀の北宋後期から南宋前期頃の製品と考えられる。

以上、既に公表されている資料をもとに墓地出土の中国南方産の製品をとりあげた²⁶⁾。その結果、墓地に副葬された南方産の製品のほとんどは、とくに北宋代においては景德鎮窯系の青白瓷、白瓷であり、また数量的にも少ない状況にある。またその年代は、基本的には11世紀中頃以降の北宋中期頃から見られるようになり、ほとんどは11世紀後半～12世紀前半の北宋後期から南宋前期頃の製品である。

後述するが、墓地出土資料以外の製品では若干ではあるが南方産瓷器は越州窯系青瓷のほか、南宋代(金代)にまで下ると龍泉窯系青瓷、福建産の白瓷、あるいは一部青白瓷なども見られる状況であることを考えると、南方産の製品の中でも北宋代においては景德鎮窯系の青白瓷は陶磁器の枠組みの中において、山東地域においても高級な製品であったと想定される。

Ⅲ、南方産陶磁器の時期的変遷と分布と使用状況

(1) 北宋中期

山東地域における北宋中期の南方産陶磁器出土事例としては牟平北頭墓群がある。当該遺跡は黄海を臨む海岸からわずか1.5kmの所に立地している。完全な形で検出された1号墓、2号墓以外にも、その周辺から多数の石板や陶磁器片が散乱しており、おそらくこの2基以外にも同様の墓が存在していたものと思われる。1号墓の副葬品は瓷碗1件、石硯1件、銅銭1枚、2号墓の副葬品は瓷碗1件と、陶硯1件である。1号墓の墓坑は砂層を掘り込んで、四壁は天然の石板をおいて石棺を作っているが、石棺底および蓋は構築していない。墓坑長は238cm、幅はわずかに42～64cmと簡素な小型墓である。2号墓も1号墓もほぼ同様の構造であり、副葬品と墓室構造を見ても社会的身分は高くな

23) 山東博物館 2004『山東博物館藏珍・瓷器卷』山東文芸音像出版社。

24) 謝治秀主編 2008『輝煌三十年 山東考古成就巡礼』文物出版社。山東省文物局等編 2013『梁山薛垓墓地』文物出版社。

25) 張柏 2008『中国出土瓷器全集 6 山東卷』科学出版社、図

131。

26) 筆者は山東大学博物館などで数点の北宋後期の青白瓷を実見している。そのため実際にはさらに山東地区の墓地出土の青白瓷の数量は増えるであろうが、現在までに報告がなされているものは上記の通りであり、全体的な数量としては非常に少ない。

いものと思われる。しかし、一方で景德鎮窯とは特定できないが南方産と想定される青白瓷を副葬していることは興味深い。また報告文の中には墓の周辺には陶瓷器片が散布していたとあり、この墓域にはさらに南方産の青白瓷が存在していた可能性もある。いずれにせよ水注と注碗がセットで存在していたであろうし、碗鉢類よりもさらに高級な製品であつと思われる。また副葬品の中には、当該期に山東地域で一般的な墓で副葬される在地産を含む、北方系の白瓷が見られないが、いずれの墓地も硯が副葬されている。墓主が特殊な状況下で没し、海岸沿いに埋葬された可能性が想定される。

牟平での北宋中期と想定される製品が見られることは、煙台威海沿岸一帯が華北、東北や遼東地域と南方地域をつなぐ交易ルートの重要な結節点の一つであつたことが窺い知れる。

(2) 北宋後期

山東地区の北宋後期の墓葬の副葬品には中国南方産の陶瓷器が明らかに増加している。その分布も i) 北宋前期以来見られる沿岸部地区、主に煙台周辺、ii) 章丘済南一帯、iii) 宋代の大運河が整備された沿線地区（但し分布は散発的）、さらに iv) 泰山東南部に位置する内陸地区の沂水の 4 つに分けられる。

i) 烟台地区では栖霞県慕家店北宋墓群（M1、M2、M3）や長島宋墓、萊州市黒羊山宋墓などの事例がある。

慕家店北宋墓群は栖霞市観里鎮慕家店村東に位置している。遺跡の地表面には石碑、石坊、華表と呼ばれる墓地の前に立てる表柱、墳墓の前に配される翁仲と呼ばれる石人像、攬馬等の存在が確認されている。清道光二十八年（1848）の『重修栖霞慕氏族譜』には次のような記載があると同墓地の調査報告の中で指摘されている²⁷⁾。

吾慕氏之来栖霞九百余年……自先世避五季之乱、徙居方山西慕家店、至宋熙寧而宗盖公始顯又二百余年、信公墓在村東数十武、祖塋南偏、今豐碑屹然、石坊、華表、翁仲、攬馬俱存。

実際に3号墓の墓誌には、「宋故朝奉大夫墓誌」の銘が見られ、この墓が宋代の大夫の爵位にあつたことを示しており、非常に社会的に高い身分であつたことがわかる。副葬品も非常に精緻な青白瓷、合子、さらには銅杯托も見られるほか、鍍金腰帶飾片、銀環、石硯もある。

また墓葬の形態に関しては、3号墓は円形ドーム状の天井をもつ磚室墓（円形穹窿頂磚室墓）、平面は円形を呈し、直径3.38m、天井高3.6mであり、墓室内には彩絵が施される。このことが墓主の生前における社会的身分が高く、経済力も一定の力を保有していたことを示している。また同様に、1号墓は券頂磚室墓であるが、銀簪、銅鏡、瓷合子などの副葬品がある。合子の底部には「段家合子印」の五字が印花により表されており、また銅鏡の銘文には「胡州石家念二真清同照子」の11字が見られる。段家合子と湖州銅鏡は当時、南方産の製品として著名であり、この時期に青白瓷を副葬品としてもつ墓主は一定の社会的地位をもつ身分であり、さらにこれらの商品を購入することができる一定の経済的能力をもっていたことを示している。また2号墓の券頂磚室墓は、鍍金簪、銀簪、白瓷合子、青瓷合子、玉水盂、玉合子、水晶珠、銅鏡が副葬されており、精美な瓷器や銅鏡以外にも、金銀器や玉器なども副葬されており、墓主がさらに富裕な存在であつたことがわかる。

このような青白瓷の受容・使用のあり方について、済南地帯の墓葬の状況も共通した様相が見られる。

ii) 済南一帯では、章丘女郎山宋墓区と済南市内で墓地が点在している。章丘女郎山宋代墓葬は

27) 李元章 1998 「山東栖霞市慕家店宋代墓仿墓」『考古』1998年5期、45-49頁。

110基発見されており、その多くは北宋中後期、金代の墓葬は8基である。110基の墓からは瓷器が120件検出されており、瓷罐と瓷碗が主である。これらの瓷器のほとんどは山東地区の窯で焼造された白瓷であり、他地域産のものはわずかに数件という程度である。多くは1～2件、山東産の白瓷が副葬され、墓の構造も比較的簡素であることから、先にみた大夫などの身分のものと比べても明らかに階層的に低い人々が埋葬されており、外来の南方産の瓷器や奢侈品の入手や副葬は経済的に困難であったものと推測される。女郎山墓地の中で青白瓷を副葬されている208号墓は円形磚室墓であり、墓壁は青磚を切り出して仿木廓構造となっており、墓主は明らかに階層的に上位あるいは中位の者であると想定でき、その経済力も、その他の墓の墓主と比べても明らかに高いと考えられる。

iii) このような状況は山東地区の西南部に位置する宋代の大運河（京杭大運河）が整備された沿線地区梁山薛垓墓地でも同様である。梁山薛垓墓地は北宋墓葬が61基発掘され、31基が成人墓であり、30基が小児墓であった。成人墓は磚砌墓室であるが、その構造は非常にシンプルであり、墓室は狭くまた副葬品も非常に少ない。小児墓も簡素で狭い磚室墓で、副葬品も少ない。合計で22件の瓷器が検出されているが、そのうち白瓷罐11件、白釉碗9件、南方産と考えられる青白瓷はわずかに1件である²⁸⁾。このことから北宋後期において、山東地区の士大夫でない一般の社会成員は、在地産の白瓷の罐と碗を主に副葬品として使用しており、外来瓷器を副葬品として用いることはできなかったと考えられる。

iv) 沂水宋墓が所在する当該地区は、日照や五蓮、諸城などの地域に隣接するが、日照の沿岸部から直線距離で内陸に約90km入ったところにあり、内陸地域である。墓地は残念なことに、既にかく乱をうけた状態であった。現存していた墓底は長さ114cm、幅78cmであり、そこから瓷碗5件、青瓷盤1件、白瓷碟1件、灰陶埴2件と三彩陶埴1件が出土した。非常に限られた範囲の中から豊富な副葬品が検出されたことから、墓主の社会的地位は高かったと想定される。また楽器である埴を副葬されていたことから、音楽にも精通していた可能性もある。

以上、全体を通してみると、北宋前期段階には南方産の製品の流通は極めて少なかったものと思われる。北宋中期に主に沿海地域、とくに煙台地域で見られるようになる。おそらくは海上交易ルートと関連しているものと思われる。なぜなら華北や東北全体でみると、越窯系青瓷は10世紀、景德鎮窯系の青白瓷は11世紀の初め頃には遼の貴族墓や寺院などから出土²⁹⁾しているからである。北宋後期になると、南方産瓷器は山東の内陸地域にも見られるようになる。ただし、その需要層、あるいは流通しそれを使用できる人々は、一定の経済的実力をゆうする士大夫以上の人々であり、一般的には在地の白瓷が流通し、使用されていた状況であると評価できる。

IV、南方産瓷器の山東地区への流通経路

上述の結果、現状では、南方産瓷器の山東地区における流通のあり方は大きく北宋前中期と後期の二つの段階に分けられる。

北宋前中期の主要な流通経路は海路によるものである。山東半島と南方の海上交通ルートは新石器時代の玉器や稲作の伝播などについてもその可能性があるが、いずれにせよ古くから存在している。清朝の顧炎武『日知録』巻二九、六海師には次のようにある。

海道用師、古人蓋屢行之矣。吳徐承率舟師自海入齊。此蘇州下海至山東之路。越王勾踐命范蠡、舌

28) 山東省文物局等編 2013『梁山薛垓墓地』文物出版社、239頁。 29) 劉濤 2004『宋遼金紀念瓷器』文物出版社。

庸率師沿海溯淮、以絕吳路、此浙東下海至淮上之路。唐太宗遣強偉於劍南伐木造舟艦、自巫峽抵江、揚、趨萊州、此廣陵下海至山東之路。

(下線は筆者による)

実際に、海を臨む地域である山東乳山県海陽鎮³⁰⁾、胶南県寨里郷、胶南鎮³¹⁾ などでは、唐代長沙窯の製品が出土している。山東と江浙の間は、海上交通は非常に利便性が高く、そのため人の往来や情報、物品などの輸送が活発に行われた。孔平仲は密州にいた際に、頻繁に南方に居住する家族からの手紙を受け取っていたことが、彼の残した詩文から分かる。

早承会稽信、晚接清江使。兩地千余里、尺書同日至。既知骨肉安、復得隣里事。

登州は古くから南北海上交通の重要な港であり、北宋代には登州と萊州の伝統的な港を除くと、密州板橋鎮の位置づけが非常に増しており、やはり南北海上交通における重要な拠点の一つとなった。板橋鎮遺跡からは、例えば景德鎮の青白瓷、福建閩江下流域の白瓷や建陽産と思われる黒釉瓷器、龍泉窯青瓷、吉州窯などの、北宋中後期から南宋前期を中心とする南方産瓷器が出土している³²⁾。

北宋後期になると、南方産瓷器の山東地区における流通のあり方は、中期以前の様相とは異なる。それは沿海部を中心とした海運路線による交易と流通以外に、内陸の運河を利用した交易と思われる現象が増加していることを看守できるからである。内陸運河は東西と南北の大きく2つのルートがある。

東西ルートについて、江少虞『宋朝事實類苑』巻二一の官政治績の「起清淄、合黄河、歷齊、鄆、涉梁山、濟州、入五丈河、達汴都、歲漕百余石」の箇所を引用した、張東照氏(2006, p150)は、この東西ルートは北宋時期の最初の頃に開削された広濟河により、黄河、大清河と内陸の水運航路がつながり、このルートを利用して、食料、絹、布、食塩、海産物が汴京まで輸送されたと指摘している³³⁾。このことは沿岸部の港から済南章丘に至り、さらに内陸地域へ南方産瓷器などを輸送する経路としても充分に利用でき、北宋後期には済南や章丘で多くの南方産陶瓷器が見られるが、この流通経路の発達と関連していることは十分に可能性が高いと考えられる。

南北路線は隋唐代に建設された大運河であり、南方から南方産の陶瓷器が山東地区に輸送されたという経路である。もちろんこの時期は運河が完全に南北を直接的に結んでいたわけではないが、山東南部地区の東平湖一帯は水運が発達しており、やはり南方産瓷器は山東の内陸地域にこの運河を利用して入ってきた可能性もある。

以上、南方産陶瓷器の分布の状況から、その輸送のあり方について考察を行ったが、北宋時期の交易における陶瓷器輸送は海上輸送が主要であり、登州、萊州、板橋鎮等の著名で大規模な港を除くと、おそらくは山東沿岸一帯には数多くの小規模の港が存在し、それらが相互にリンクしながら南北の海上交通を支えていたものと思われる。そして北宋後期になると、伝統的な海上運送ルート以外に、大清河を利用して東西方向への輸送経路、隋唐大運河を利用した南北方向への輸送経路が構築され、より多角的な交通網・輸送経路が確立した。それが南方産の陶瓷器が山東地区へより多く流通させ、需要の高まり、あるいは使用の増加を促した可能性が高いと考える。

30) 姜書振 1998「乳山發現一座唐墓」『中国文物報』1998年5月20日。

31) 王雲霞 1990「胶南出土唐代長沙窯瓷器」『中国文物報』1990年11月1日。

32) 青島市文物保護考古研究所 2014『胶州板橋鎮遺址考古文物図集』科学出版社。

33) 張照東 2006『宋元山東区域經濟研究』齊魯書社。

本論は、宋代における墓地出土の南方産陶磁器を分析の対象としてきた。この他にも都市遺跡内、寺院、港で出土する南方産陶磁器の数量や種類は少なくない。墓葬に副葬された南方産陶磁器の多くは景德鎮窯系の青白瓷が主体である。しかも多くは北宋代である。山東地域は、開封が陥落して以降は金朝の領域になっている。そのため、これまでは政治的背景のために金－南宋時期においては、南方産の陶磁器は少ないと考えられてきた。先に紹介した北宋代に市舶司と考えられている板橋鎮遺跡なども北宋時期の陶磁器が主体であるが、一方で金代に入った南宋前期の福建産と思われる白瓷なども少なくない数量見られる³⁴⁾。また、今回とりあげた副葬品の中にも南宋期に下る南方産の陶磁器も認められた。

金朝が華北を支配した当初は、山東地域も当初人口は激減したが、しかしその後、金代中期には人口は北宋時期よりも増加し、経済活動も活発になったという指摘もある³⁵⁾。その一方で、墓地においては、所謂、士大夫、官吏、豪族地主といった身分の高い人々の中で北宋代に好まれた景德鎮窯系の青白瓷は副葬されなくなっていることは興味深い。金朝時期にもっとも多く見られるのは定窯系の白瓷が多い。

このような状況がどのような陶磁器流通および組成の中で位置づけられるのかについては、現在まだ調査・研究中であり、別稿で改めて検討することにした。

本研究は平成26年度西田記念東洋陶磁史研究助成における研究成果の一部である。また本研究は当初、故上田秀夫山口県立萩美術館・浦上記念館学芸顧問が共同研究者として参加予定であったが、平成26年5月に急逝された。上田顧問は本研究を進めること、現地調査に赴くことを切望されていたので、極めて残念である。本成果は、故上田顧問の墓前に捧げることをお許し願いたい。

謝辞

本研究を行うにあたり以下の方々、機関にお世話になった。記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

謝治修、郭思克、于秋偉、郭映雪、劉海宇、森達也、小林仁、鄭銀珍、山東省文物局、山東博物館、煙台市博物館、青島市文物考古研究所、登州市文物局

34) ただし商品として山東地域に流通させるためのものであったかは今後の検討課題である。

35) 張照東 2006『宋元山東区域經濟研究』齊魯書社、p67、p173